

青山会創立 30 周年記念企画

鼎談「青山会の歴史」

2018 年 5 月 19 日

ANAクラウンプラザ宇部

国際会議場 東の間

田中聖児先生

水田英司先生

岡 正朗先生

司会 永野浩昭



YAMAGUCHI
UNIVERSITY



Gastroenterological
Breast and Endocrine Surgery

30周年記念企画－鼎談 青山会 30年の歴史－

巻頭言

2017年5月、私たちの同門会“青山会”は、設立30年の節目を迎えました。その年の総会・懇親会の席でお酒が進む中、同門のベテランの先生たちは設立時の思い出話に花が咲きました。学外から来た教授の小生にとっては、知らない話ばかりで非常に興味深く、ついつい会話に加わらせていただき、いろいろと質問もさせていただきました。その時ふと頭の中をよぎったのは、さて、この話、平成世代の教室員たちにとって、“実は知らない話”ではないのか？ さっそく、数人の若手に聞いてみると、“何ですか？ 全く知りません。”、、、案の定でした。それどころか、もう少し上の世代にとっても、そのあたりの知識は皆無に等しいことがわかりました。

そこで、そのあたりの歴史を再確認する意味で、1年後の青山会総会・懇親会において、青山会・重鎮3人にご登壇いただき「青山会の歴史」と題して鼎談を企画しました。そして、小生が、山口大学の外部より着任した教授として、先輩たちに教を乞うという形で、司会をさせていただくことにしました。

その内容の詳細については、後述のとおりですが、予定していた45分はあっという間に過ぎ、本企画・第二弾のリクエストさえ会場から起こったほどの好評でした。

さて、鼎談を通じて、設立の経緯が少しずつ紐解かれていきましたが、当時は学生運動が盛んであったこともあり、教授と医局員には少なからず軋轢が常にあったこと、また当時の地方大学は創立直後でもあり、自学の卒業生の数は非常に少なく、教室の初期メンバーとして勤務していた他大学出身者との間に、言葉に出せない壁が存在したこと、その中で自学卒業生たちの数が少しずつ増え教室主要メンバーが変わっていく中で、同門会設立の機運が芽生え始めていたこと、などなど、今では想像もできないような状況と時代であったことが浮き彫りになりました。同門会という仲間の会でもあり、あるところは遠慮会釈なく、しかしながらその一方で、先人に対する十二分な配慮を持ちながら、鼎談は進んでいきました。今回、このような形で冊子を作製したのは、当日の記録を形にすることで、青山会を設立された多くの先輩たちの思いを未来に向けてしっかりと継承していきたいと考えたからでした。そしてそのことで、教室員には歴史を認識することの重要性や、先人の功績と苦勞の中から未来への可能性を探ることの意義と意味を、あらためて肌で感じてくれると願っています。

最後になりましたが、本鼎談の企画に快くご賛同いただいた青山会役員会と、当日ご登壇いただきました、田中聖児先生、水田英司先生、岡 正朗先生に心から感謝の意を表しまして、巻頭言とさせていただきます。

2018年10月10日

山口大学大学院 消化器・腫瘍外科学 教授

青山会 副会長 永野 浩昭



○(鈴木伸明) ただいまから、山口大学消化器・腫瘍外科学(第二外科)同門会、青山会の創立と歴史にまつわる鼎談の時間とさせていただきます。

それでは、本日鼎談をお願いしております、田中聖児先生、あとは水田英司先生、岡正朗先生の3人の先生方をお願いしたいと思います。(拍手)なお進行は永野教授をお願いしておりますので、よろしく願いいたします。

○(永野浩昭) 重鎮の先生方、足元にお気を付けいただいて御登壇いただけますでしょうか。

皆さん、どうぞ御着席下さい。

さて冒頭に御挨拶させていただきましたように、昨年、第30回青山会総会のときに、ちょっとなかなかいい企画ができなくて、今回、第31回にこれまでの30年をまとめていただくという意味で、青山会の歴史とこれからについて、3人の同門の御重鎮に、御登壇いただきましてお話ししていただくことといたしました。

一応プログラムには、鼎談とさせていただきましたが、本来鼎談というのは司会はなしですので、ある意味座談会という形にさせていただきたいと思います。といいますのは、このお3人に自由にご発言いただきますと、多分2時間半ぐらいかかるんじゃないかなと思いますんで、、、(笑声)。一番この中で青山会の歴史を知らない私が質問をするという形で司会をつとめさせていただいて、進めてきたいと思います。

改めまして、本日司会を担当します山口大学消化器・腫瘍外科学、永野でございます。よろしく願いします。(拍手)

また、本日御登壇いただいております先生方は、先生方から向かって右側より岡正朗学長、前青山会副会長でございます。(拍手)それから、向かって一番左側は、現青山会会長の水田英司先生です。よろしく願いします。(拍手)そして、真ん中にお座りいただいておられますのが、前青山会会長田中聖児先生です。よろしく願いします。(拍手)

実は先生方には前もって御質問事項をお知らせしております。それでは、今回の鼎談においては、青山会の歴史について、「青山会設立まで」、「青山会設立とその後」、そしてあと、「青山会にかける思い」というように3つのパートに分けて皆さんにお話しいただこうかなというふうに思います。

一番最初の質問は、青山会って実はいつできたのかというのが、あんまり皆さん御存じないんですが、恐らく青山会50年史だと、昭和62年にできたと記載されていますが、水田先生、それでよろしいですか。

○(水田英司) そうです。(3代前の)教授の、石上浩一先生が退官された後ですから、昭和62年になります。

○(永野浩昭) 青山会ができたのは昭和62年ということになると、それこそ裕先生、吉野先生が卒業した後ですか。ということは、それまで実は第二外科の同門会って、一体どういう形だったのかというところを

ちょっと教えていただかないと、これからの話に進めません。田中先生、青山会設立までの歴史というのを少しまとめていただけないでしょうか。

○(田中聖児) 簡単にお話しさせていただきます。

昭和26年に第一外科の助教授でありました岡村先生が、第二外科の初代の教授に就任されました。岡村先生は3年ぐらいで退官されて、そのあと、昭和29年からですか、徳岡俊次教授が後任として(京都大学御出身)着任されました。

その後、3代目の石上先生の御在任までは、同門会という組織はなかったんです。何かの機会に忘年会であるとか、あるいは新入会員の歓迎会であるとかいうようなときに、集合をかけて、同門会らしきものをやっておりましたけれども、その間の実態というものはほとんどございませんでした。

それで、4代目の鈴木教授が来られるときに、館林先生、森岡先生、小倉先生、私を含めて、何人かが集まりまして、新しい教授が赴任されるまでに、同門会をつくろうということになりました。

それで、私に同門会の規約の草稿をつくれということになりまして、他の教室の規約を寄せ集めて草稿をつくったのが、現代の青山会のもとになります。

○(永野浩昭) ということになると、田中先生、その前までは、例えば本日は100人を超える同門の先生とかお集まりいただけてますけど、そのときまでは、名前もなかった。

○(田中聖児) 特に名前はなかったですね。

○(永野浩昭) 田中会とか、そんなことなかったですか。(笑声)

○(田中聖児) なかったんですけど、、、。

○(永野浩昭) それでは、例えば教室員が集まることはあっても、関連病院の先生方と一緒に何か会をするということもなかった。

○(田中聖児) そうですね、初代(岡村教授)のころは、うち(山口大学 医学部)の卒業生はまだおりませんでしたので、いろんな大学からの卒業の先生方が集まって、同門ということになってました。ということで、(同門会というような)組織というものができてなかったですね。

○(永野浩昭) ありがとうございます。

○(水田英司) ちょっと補足していいですか。

○(永野浩昭) お願いします。

○(水田英司) 手元(残っているものの中で)にこういう小さな冊子があるんですけども、これが山口大学外科学教室第二講座の同門会名簿で一番古いものです。

○(永野浩昭) それは、青山会設立以前のものですよね。

○(水田英司) そうです。これができたのが、昭和45年です。この以前にも、何度か教室の先生方の名簿をつくられたようですが、それは紛失しています。

○(永野浩昭) ということはそれ以前の記録はないということですね。

- (水田英司) この中にいろんな手記があるんです。例えば、もともとは第二外科も、昭和47年まで、脳外科と一緒にだったですから、それまでの脳外科の先生方の中で元教授されていた青木先生とか、それから東先生、助教授されてましたけども、そういう方々の寄せ書きがあるんですけども、これを読みましても、冊子には「同門会名簿」と名前がついてるんですが、役員が誰とか規約とかは載っていないし、(正式な)同門会をつくったという話は一切出てきません。
- (永野浩昭) なかったんですか。
- (水田英司) はい。はっきりなかったとは言えないんですが、同門会(らしきあつまりのようなもの)があったのはあったらうけども、実際にこういうきちんとした名簿がつくられたのは昭和45年が初めてということですよ。
- (永野浩昭) 先生が御卒業される前ですね。
- (水田英司) そうです、村上卓夫先生が卒業したときです。
- (永野浩昭) そういうのが、いろんな形で、名簿はつくったりとか。それと、第二外科から脳外科でできたというふうな。徳岡先生のときに、脳外科をつくりたいからということで、徳岡先生は、いろんな事情で、脳外科ができることは見ずに退官されたとお伺いしてますけど、そんな感じで、まだ昔は一緒だったということですか。
- (田中聖児) はい。それでそのころは、消化器外科も徳岡教授の指導で、脳外科は青木先生の指導で、二外科と一緒にやっておりました。
- (永野浩昭) 実は私、きょうこへ来るまでに(第二外科)五十年史というのをあらためて読みました。歴代の会長が、それぞれにコメントを残されてて、どうも最初のころは、初代の教授は、学長とけんかしたとか、2代目の教授は教室員ともめたとか、いろんなことが書いてあって、これなかなか山口大学第二外科の歴史は難しいものがあったんじゃないかなと、同門会前夜というのは、なかなか厳しい状況だったんじゃないかなと思うんですけど、岡先生は、そのころはまだ、御卒業されてないですよ。ただ、同門会できたときには、もう10年たたれてましたから、その辺の、御卒業されたときの同門会の御事情というか、医局内の雰囲気とか、どんな感じであったか御記憶はありますか。
- (岡 正朗) 忘年会なんかは、やりましたよね。
- (永野浩昭) 忘年会？
- (岡 正朗) だけど、それは、関連病院の先生と一緒に来られて、それで看護師さんも一緒に、どんちゃん騒ぎをしたという。(笑声)
- (永野浩昭) 第二外科の忘年会に、関連病院の先生も参加されて。
- (岡 正朗) そう、そんな感じですかね。
- (永野浩昭) そこに看護師さんも来られて、そして水田先生が酒池肉林されてた(笑)という、そういうことでよろしいですかね。(笑声)

- (水田英司) いや、もう少し詳しく言いますと、同門会の行事というのは、6月ぐらいに新入局、昔は先生、何ていうの、6月に(医師)免許がおりました。だから、6月に入局するような格好になってたんで、6月に新人の、新入局の歓迎会というのがあるんです。それがまず第1回と、それとあとは、夏に教室員と看護師さんで、酒池肉林じゃないですけども、海水浴に行ったり。(笑声)それから、冬は12月に忘年会をやる。小さな教室ですから、ドクター寄せ集めても、教室員って12、3人ぐらいだったですかね、あのころ。もっと少なかったかもしれません。
- (岡 正朗) 研修医を入れても15、6人だったですかね。
- (水田英司) だから、看護婦さんは、30人か40人いますから、とても賄い切れないんで。
- (永野浩昭) 予算がある程度かぎられているってことですね。
- (水田英司) それで外の先生方を呼んで、一緒に懇親を深めたと、そういう時代です。
- (永野浩昭) ということは、拡大医局懇親会みたいな形で、それはまだ同門会という状況じゃなかったという。
- (水田英司) そうです。
- (永野浩昭) いよいよここから核心に入っていきたいと思うんですけど、同門会をつくろうかという話になり始めたときの経緯というのは、多分、青山会設立の“きっかけ“ということになると思うんですが、これは、ちょっと水田先生に御解説いただきたいなと思います。
- (水田英司) そうですね、さっきも言いましたように、石上先生がおやめになって、次の教授選が始まるというときに、やはり教室として、(しっかりした)同門会があって、同門会としての意見をどこかで表明しないといけないなというふうな話がありまして、それまでは、同門会の会長というのはプロフェッサーだったんです。ですから、同門会会長が石上先生の場合は、石上先生、徳岡先生の場合は徳岡先生ということで。はっきり言って役員と言うのは、会長しか決まっていなかったんです。じゃあ、会長が退官になってやめたら、同門会としての意見を言うことができないなというので、きちっとした同門会をつくろうと。結局、同門(山口大学卒業者)の中から会長を選んだ形での、同門会をつくろうという、そういう機運ができたんです。それが、教授選の前です。教授選が62年の7月にありましたから、その年の3月に初めて同門会をつくりましょうっていう設立委員会というのをつくったんです。この時は、もちろん田中聖児先生も(主要)メンバーですし、初代の青山会の会長の館林先生とかも(主要)メンバーです。それでいろいろ考えて、こういうふうにして、ああいうふうにしていうんで、まずとりあえず規約をつくりましょう、名簿をつくりましょう、そしてそれを基に、同門会をたちあげるための総会をやりましょうということで、3月に初めてそういうふうな機運ができました。それから、その翌月の4月に同門会の総会をやって、このときは、今言ったように規約を成立させるのと、あと、会長を選ぶのが主な議題でした。このときに会長を館林先生にしましょうということ、それから、いろんな役員会とかの取り決めを決めたんです。それで、初めて現在の形の第二外科の同門会ができて、このときはまだ青山会という名前ができてないんです。この翌年にできるんです

けどね。その後、7月に教授選に移行するわけです。

- (永野浩昭) ということは、今のお話をお伺いすると、もともとは拡大医局懇親会で始まって、そして、ちょっとしたいろんな目的があって、いろいろ集まれたのが、本当に仲間として集まろうという気持ちが出てきたのは、教授が交代する毎に、同門の連続性とそれに対する何か仲間意識が、そこで断絶されることがあったりとか、そういう経験をふまえてもう一つしっかりしたものをつくりたい、そういう思いでいいんですか。
- (水田英司) そうですね、それが一番。
- (永野浩昭) そういう形で、恐らく医局員の先生方もふえ、関連病院の先生方の人数もふえ、この仲間ですら1つのことをしたいなんて、そんな思いがあって青山会をつくられたんだと思うんですけど、岡先生も、そのころもう医局のある意味、幹部でいらっしやったんですかね。
- (岡 正朗) はい、私ももう入局していました。そのとき講師だったんで。
- (永野浩昭) 講師ですか。
- (岡 正朗) 村上先生が助教授で、そして、水田先生と私が講師でした。
- (永野浩昭) ということになると、あ、村上先生から挙手がありました、当時の一番のベテランでいらっしやいますが——何か、(拍手)どうぞ。(笑声)多分、こういう状況になるんじゃないかなと少し期待してましたけど。
- (村上卓夫) 石上先生のための教授選で、同門から教授立てようということで、私が当時助教授で、今の准教授ですね、教授選に立つということで。だから、教授選に立つには、同門会が一つになって応援しようということで、それでまとまっていた。ただそのときに僕は当事者だったんで、僕は外されて、すすめられた。
- (永野浩昭) そうなんですか。
- (村上卓夫) 僕が入ると、またおかしなことになる。
- (永野浩昭) わかりました。
- (村上卓夫) それで、一番最初、その会ができて、僕はそういうふう記憶してます。
- (永野浩昭) ありがとうございます。一番言いにくいことをあえて言っていたんじゃないかなと思うんですけど。(笑声)そのときに、ちょっと岡先生にお伺いしたいのは、多分、岡先生も講師でいらっしやったんでしょうけど、(外科の)医局って何だかんだいいながら、学年が1年違うと外科の世界、天皇と奴隷みたいな状況なんですけど、確かに仲間のトップは、これから立てようかという機運は高まってくるんですけど、じゃあ、そのころの本当の中堅というか、若手というか、実務やられてる先生方も、それは思いは一緒やったということによろしいんですか。やっぱり、やろうぜっていう感じでした。
- (岡 正朗) 人が少なかったですね。いや、僕は51年卒業で、62年のことでしょう。11年ですよ、卒業後。そこで講師なわけじゃないですか。ナンバー3なんですよ。(笑声)もう教授がないから、若造の、

私が若造なんです。

○(永野浩昭) いや、多分ちょっとそういう状況じゃないかなと思ったんで、やっぱり若手の先生方にもそれぞれのご意見あるんじゃないかなと思ったんで、その辺は、もうそこは一枚岩でって感じでした。

○(岡 正朗) いやあ、それはあんまり問題はなかったですね。逆に人がいないんで、もう。

○(水田英司) いや、一枚岩です。

○(永野浩昭) わかりました。(笑声)

○(水田英司) 結局、それぞれの同門会員や医局員の実の気持ちはやっぱり、まあいろいろあるんですけど、、、。

○(永野浩昭) いや、わかります。(笑声)

○(水田英司) やっぱりなってほしい人が教授になってくれないと、困るなという気持ちがあったんで、医局内ではそういうふうな意思統一はできてたと思います。決して大人数じゃないですけども、一応エイエイオーちゅう感じでいきましょうと。やっぱりその辺で、実際に選考委員会に行って、医局員および同門会員総意の要望書というのを出したんですけども、、、。

○(永野浩昭) わかりました。

○(水田英司) たしかそういうことだったと思います。

○(永野浩昭) その一言を聞いたかっただけなんですけども、その辺で……、村上先生、どうぞ。

○(村上卓夫) いや、反対するような人はいませんよ。先生、そんな、そういうような状況ではなかったですけどね。我々も、本当に一生懸命、そのつもりで努力してましたし、同門会もそういう形で設立されてましたから、何の反対もなかったと思います。

ただ、同門会を立ち上げるに当たっては、どういうことで立ち上げるんだといういろいろな意見が、先輩方にはありましたけど、最終的には、一点の曇りもなくその方向で、同門会は設立されたと思います。

○(永野浩昭) ありがとうございます。

○(岡 正朗) 60年前後の卒業の年度の人に聞いてみてください。

○(永野浩昭) 60年前後というと、例えば林先生、60年前後で、何かよろしいですか。もうそのころは御卒業されてましたですから、多分、御入局されてたと思いますけど、何かそのあたりのときの思い出とか。

○(林 弘人) いやもう、入局したばかりなので、諸先輩方についていくしかなかったんですけども。

○(永野浩昭) ああ、そうですか。(笑声)

○(林 弘人) 外の病院から帰ってきたときに、もう本当に臨床は岡先生とか、あるいは(秀浦)先生とかが医局長になられてたので、もう我々、その後についていったということですし、あの医局に関していえば、もう本当に村上先生、水田先生が引っ張られてたので、我々はもうわけがわからないので、もうついていくしかないというような形だったんですけども、医局ってというのは、我々若い者なりに、何かすごくまとまっ

てるなっていう印象は、そのときには受けたなということは、若干ながら記憶しております。

○(永野浩昭) 林先生ありがとうございます。ということで、これまでお話していただいたような感じで青山会前夜という状況やったと思うんです。

ということになると、そのころの、多分、いろんな苦労話があると思うんですけど、そこはちょっと田中先生にお伺いしたいなと思うんですが、先生は、もうそのころは御開業されてましたですね。

○(田中聖児) 私は開業しておりました。

○(永野浩昭) ただ、同門会でいうと、いわゆる、幹部ということになりますね。

○(田中聖児) 初代(岡村教授)、2代(徳岡教授)のころというのは、山口大学の卒業生でない方が随分たくさんいらっしゃいまして、同門意識というのが、非常にまだ希薄だったもので、だんだん2代、3代となってくると、もう何十人という山口大学の卒業の先生方がふえて、やっと同門会組織というものをつくろうという雰囲気が出てきたときに、教授選ということで、何とかみんなの意見が反映できればというようなことで、組織をつくろうという雰囲気になりました。

○(永野浩昭) ということになると、ある意味、山口大学を卒業された先生、もともとは、これはもう皆さん御存じでしょうけど、第4代までの教授は、皆、京都大学御出身で、それがまだ山口大学卒業生が、少なかった時代に、だんだん山口大学の卒業生がふえてきて、そして、仲間が皆同門、つまり山口大学の卒業生になって、その割合が物すごく高くなってきて、そして、たまたまその時期に教授選挙があつて、そこで一つの大きなまとまりをつくろうといううねりがあったことは間違いない。時と人の流れとが、ちょうどいいタイミングになったと。そんな感じで、同門会の機運ができてきたっていう、そういう理解でいいんでしょうか。

○(田中聖児) 口に出してそういうことを言う人はいませんでしたけども、雰囲気としてはそのような感じになってきて、もうぼつぼつ同門会をつくろうという雰囲気になってきたんです。

○(永野浩昭) わかりました。水田先生、ちょっとお伺いしたいんですけど、そのころに、例えば、拡大医局忘年会、拡大医局旅行会みたいなんで一つのまとまりを持っていたんですけど、そこから、第二外科は、一つの舵を切ったわけですね。つまり同門会をつくる、そして規約をつくる、本当の組織をつくるぞっていうことになったんですけど、そのころの、例えば、ほかの教室はどうやったんですか。例えば、何とか会みたいなものがたくさんあつて、第二外科は、実は非常に遅い状況でなったのか、それとも、ある意味大学の中で先駆けてそういう同門組織をつくられたのかというのは、その辺はどうなんですか。

○(水田英司) ほかの教室の様子は、全く気にしてなかったんで、聞くこともなかったんです。ただ、うちの同門会ができてから、幾つかのクラインの教室、どうやってつくったんやという問い合わせはありました。ただどうちがつくるときに、例えば、第一内科とか大きなところに問い合わせをして、どうするのかということ、聞いたことないんで、ひょっとしたらほとんどなかったんじゃないかなと思うんです。

○(永野浩昭) 具体的に言うと、例えば、隣の第一外科なんかは、そのころ同門会というのはあつたんで

しょうか。それは、先生も御記憶はない。

- (水田英司) あったけども、うちと同じような感じだったと思うんですね。だから、結局、教授が同門会長をつとめると、そんな感じじゃなかったかなと思うんですけどね。
- (永野浩昭) 岡先生、何か御記憶ございますか。同門会がちょうどできたあたりのこと。
- (岡 正朗) 皆さんはご存知ないかもしれませんが、当時はいわゆる大学紛争というのが、根本にはあって。
- (永野浩昭) 昭和40年代ですか。
- (岡 正朗) ええ、それで私が入学したころは、もともと医学部の医局問題というのが発端になってるので、教室の先生があんまり一緒になって何かするっていうのは、教授は好まなかった時代ということがまず背景にあったと思うんです。
- (永野浩昭) なるほど、そういうこともあったんですね。
- (岡 正朗) だから、そこが一番大きな背景にあって、昔でいうと学長とか、いろんな人がつるし上げられてるわけです。そういうトラウマが、すごく当時はまだ、教授になった先生方はお持ちになっていたような感じですね。
- (永野浩昭) それがちょうど昭和60年代前半にほとぼりが冷めたっていうのもあって、ということですね。
- (岡 正朗) それこそ当時はみんなで勉強会をすとかいうのも、余り好まれなかったですね。
- (永野浩昭) わかりました。多分、平成の先生方は、学生紛争だとか知らないと思います。まだ昭和40年代御卒業の先生方は学位のボイコットをされた時代でもあります。
- (村上卓夫) 今、一外科のことを聞かれたんですけども、一外科はまとまっておりました。当時、八牧先生の後の教授として東北大学の毛利先生のところに一外科の同門会の代表がわざわざ行かれて、山口大学に来ていただくことをお願いしたいということを聞いています。だから、物すごくまとまっておりました、一外科は。うちにはそういうのが、その当時なかったんで、一外科のこと聞かれましたんで、僕が記憶をしてる範囲ではそうでした。
- (永野浩昭) ありがとうございます。先生、たびたびすみません、本当にありがとうございます。
ということで、いろんなタイミングが重なったりとか、いろんな思いがあって、同門会前夜が終わったわけですけども、いよいよ同門会つくらないといけないということで、昭和62年に始まるんですが、青山会っていう名前が何でできたかっていう話は、多分皆さん、五十年史には少し書いてはあるんですけども、何で青山会なのって、この名前というのも、やっぱり意味があるんじゃないかなと。それに対する、それこそ先達の先生たちの思いということについて田中先生に一言お話いただきたいと思います。青山会というお名前は、一体どういう形でつけられたのかなということを、教えていただいてよろしいでしょうか。
- (田中聖児) はい。同門会をつくって、名前をつけようというときに、いろいろと考えまして、3つぐらい案が出たんです。そしたら、そのとき館林先生が言われたのが青山会で、これは、月性という柳井の出身の

勤王の志士でもあり、詩人でもある人がつくられた歌があるんです。「男児志を立てて郷関を出ず、学若し成る無くんば復還らず、骨を埋むる何ぞ墳墓の地を期せん、人間到る処青山有り」という詩があるんです。これは、月性が郷里を捨てて、大阪の塾に学問に行く、そのときにつくった歌なんですが、そのときの青山という言葉を出されて、これを同門会の、名称にしたいという案が出た。ほかにも2、3あったとは思いますが。

- (永野浩昭) ほかの候補もあったということですね。
- (田中聖児) はい、ほかの名前の候補があったんですけども、その当時の集まった先生達が相談して、青山会に決まったんです。
- (永野浩昭) 最終的に幾つか出てきた候補、例えば、多数決で決められたか、そんな感じでよろしいんですか。
- (田中聖児) 多数決というよりも、数人の古い連中が集まって、話をしたところ、みんなの意見がまとまって青山会という名前になったわけです。ですから、起源は月性の詩の文句の中から取ったということです。
- (永野浩昭) ありがとうございます。そういう由来があって、青山会という名前が決まったと。そして、水田先生、昭和62年の第1回において名前が決められた。
- (水田英司) いえ、名前が決まったのは正確には第2回目の63年になります。第1回の62年はまず会長を決めました。会長を館林先生にお願いしようと。それで、翌年の63年の同門会では、実際はまだ青山会の同門会とは言っていないんですけども、このときに名前を決めようというので、今、田中聖児先生が言われたような経緯で、青山会という名前に決まったんです。そして正式に「青山会同門会」という名前を用いて会を開くのは、翌年なんです。昭和64年ですから平成元年ということになります。
- (永野浩昭) ありがとうございます。いろんな、実は水田先生のところには柳生武芸帳みたいな本がたくさんありまして、(笑声)私も見せていただいたんですけど、いろんな歴史がたくさんあって、実はちょっと簡単なシナリオをお渡しして、準備していただきました。
- さて、まだまだお伺いしたいことは実はたくさんあって、本当に残念ではあるんですけども、お時間がせまってきたようですので、そろそろこの会を締めたいと思います。また、何かの機会に第2弾ができるかもしれませんし、それはまた乞う御期待ということになります。それでは最後の締めは、これからの未来に向けて、青山会を設立された3人の同門の重鎮から一言いただけたらなと、思うんですが、これはもう年齢順でよろしいですかね。
- まず、田中先生、これからの青山会に向けての激励でも思いでもいいですが、一言いただけたらと思います。
- (田中聖児) これだけ青山会のメンバーもふえましたんで、これから青山会一丸となって、第二外科を支えていていただきたいと思います。これは、願いです。(拍手)
- (永野浩昭) ありがとうございます。それでは、水田会長、よろしいでしょうか。

○(水田英司) いや、もうまさにそのとおりなんですけども、やはり関連病院に身を置いてる以上は、やはり大学にしっかり頑張ってもらって、もちろんそのためには、関連病院はもちろん青山会もいろいろ応援するんですけども、やはり人がふえないと山口県の医療ってよくなると思うんで、ぜひそういう方向で、皆さんと一緒に同じ方向を向いて頑張っていきたいなと思ってます。

そのために、私も命のある限りじゃないですけど、、、。

○(永野浩昭) まだまだです。(笑声)

○(水田英司) 何とか頑張って応援しますんで、これからもいろいろお互いに協力し合って、頑張っていきたいなと思ってます。

○(永野浩昭) ありがとうございます。(拍手)

それでは、最後に岡学長よろしいでしょうか。よろしく願いいたします。

○(岡 正朗) 鈴木先生が赴任されたときに、青山会はとっても温かく迎えたと思うんです。そして、田中先生と鈴木先生が、お互いに、いろいろな悩みを打ち明けられたりして、いろんなアドバイスをされたりされて、多分、同門会と教室が非常に近くなったのは、そこにあるんだろうと思います。

私も、教授をさせていただいたときに、同門会にはもう絶大なる支援をいただいて、決して何か上からではなく、教室のためにということで協力していただきました。

これほどすばらしい同門会は、僕はないんじゃないかなと、今も本当に感謝をしてるんです。どうかそういう形で、教室の反映のために皆さんがお互い協力されれば、必ずすばらしい、さらにすばらしい教室になると信じておりますので、どうぞよろしく願いします。ありがとうございました。(拍手)

○(永野浩昭) どうも3人の先生方、すばらしいお言葉、ありがとうございました。もうこれ以上、何も申し上げることはございません。

最後にもう一度、本日御登壇いただきました田中先生、そして水田先生、岡先生に、皆さんの拍手をいただいて、締めたいと思います。どうも皆さん、お疲れさまでした。(拍手)

鼎談「青山会の歴史」

平成 30 年 10 月発行

発行 山口大学大学院医学系研究科 消化器・腫瘍外科学

編集責任者 永野浩昭

編集担当事務 松本葉月

TEL:0836-22-2264 FAX:0836-22-2263

ホームページ:<http://www.yamadai-gesurgery.jp/>